くらふと
県育協だより
発　行
鳥取県子ども家庭育み協会
・広報委員会
第12号
平成22年10月

この広報紙は
赤い羽根共同募金の配分を
受けて作成しています。

「子ども・子育て新システム」を考える

鳥取県子ども家庭育み協会　会長　大　橋　和　久

今、国（厚生労働省）は「子ども・子育て新システム」の具体的制度設計のため、平成23年度通常国会での法律成立に向けて作業を急いでいる。そこでは保育制度の見直し、財源、幼保の一体化、地方への権限移譲など大きな制度改革となるはずである。

時間的には短期間の制度設計、制度構築であり、現在の保育内容や子育て支援、社会サービス、「子どもの育ち」をどう保障するか検証し、構築のために時間を費やすべきだと思うのは少数意見であろうか。基本制度案要綱では、目的として「子どもへの良質の生育環境・就労支援・女性の就業促進」、方針として「社会全体で支援・利用者本位・地方主権」とし、幼保一体化・多様な保育サービス・ワークライフバランスの実現を図るとしている。

しかし、この新しいシステムを構築する背景は、まず大都市圏での待機児童問題であり、税収の増加が見込めない国家財政の中で社会保障費をいかにどこでなにを切り詰めるかと言ったところにあり前記の理念構想とは程遠く、決して積極的ではない部分に起因しているのである。

直接契約制

現制度と根本的に異なるサービスの利用において、事業者と利用者での直接契約制の導入が検討されているが、実際上は子どもが契約の当時者にはなり得ず、親の経済的な問題などでサービスが受けれないケースや児童虐待など「社会的に排除」されがちなむしろ社会的養護が必要な子どもたちへの配慮と具体的仕組みをどうするのか等明確化する必要がある。

地方主権

「地方主権」の建前は理解できるが、子どもの発達に無理解であったり、財政基盤の厳しい自治体（市町村）では新制度になると首長や議会の裁量で子どものための予算が削減されかねない。すでに保育所の最低基準は、屋外遊技場・耐火基準・保育基準など国の基準を参考にして定めることができるとしている。これを見ても市町村の裁量で基準を下方修正したり、子ども施策の施行順位が下げられたりすることが予想される。

多様な経営主体

多様な経営主体の参入が促進され、既に企業の多くが保育園経営に参入し、その功罪を結論付けることはできない。しかし、企業はあくまでも利益追求であり資本投下後は必ず資金回収することは企業の大原則である。企業が保育園を経営すると利潤のために保育コストの約8割を占めると言われる、保育者一人当たりのコストを下げることは必然である。成り行きとして低賃金労働あるいは短期雇用など、保育・教育現場での人材そのものの質の劣化や量的不足に向かうことが予想される。

理念

制度改革の大元の理念として「将来の社会をどうすべきか。子どもをどう育てるのか。」今まさに「米百表の精神」が問われている。目先の経済財政のみに囚われているのでなく、人の育成を優先させ、保育者の専門性を重要視し「子どもの育ち」を担保するのであれば、保育従事者の雇用、労働条件をこれ以上引き下げるリスクは避けるべきで見直しを含めた制度構築を図るべきではないか。現実に保育を市場化したアメリカでは質のよい保育サービスは高価になり、所得階層で利用する保育サービスの格差が生じ、格差（貧困）の世代間連鎖が起こっているとの報告がされている。このことからも一定の公的コントロール「ナショナルミニマム（国としての最低基準）と保育費の公定価格」の堅持を必須条件、義務化すべきである。

幼保一体化

幼保一体化は「制度の一体化」ありきで進められているが、従来の保育園、幼稚園の機能や役割など検証し、「一体化」の理念を明確に示すべきである。

「こども家庭省」を創設し、厚生労働省と文部科学省の垣根を取っ払い、統一の「こども指針」を新たに定め、「こども園」を設立し、保育者の資格と保育園、幼稚園、認定子ども園を全て一体のものとして位置付けるとしている。こども園構想は、待機児童対策（特に未満児保育）と全ての児童に対しての養護と教育を提供する平等性、さらには現在の幼稚園の置かれている現状を考え、社会資源としての幼稚園を有効活用（再生）として捉えれば良とすべきであろう。しかし一本化によって混乱が生じるならば、子どもの利益の視点からは避けるべきで施行までの猶予期間、試行期間、地域による一体化の内容の差、激変緩和策など必要ではないか。

特に、保育園が果たしてきた多様な保育サービスを始め、3歳未満児保育の内容等について幼稚園で理論と実践が理解され人的基準・面積基準等ハード面の対応はともかく、「保育指針」で定める保育内容が担保できるのかどうか疑問が残る。

多様な事業主体の参入による競合は、幼稚園に限らないが親への満足度を意識して乳幼児への早教育など表面的なサービスになり、「子どもの発達」への貢献（目的性）が後回しになることが懸念される。

課題

新システムの課題は山積みであるが、まず財源をどう確保するのか示されていない。消費税を始めとする税制改革が現政権で可能なのかどうか。地方分権（地方主権）による地方税の主財源方式で、地方での子どものための財源が本当に充当できるかなど疑問が残る。

お題目的な理念ではなく、将来を見据えた確たる国としての覚悟を標記し、公的コントロール（ナショナルミニマム）を確保した上で制度設計を進めるべきである。

乳幼児期（保育園）に大切なことを考える

『根っこ』を育てる保育園に向けて

東洋英和女学院
東洋英和幼稚園　園長　森　眞　理

子ども不在の子どもを取り巻く社会の動き

「日本の教育予算（加盟）28カ国中最下位」（ＯＥＣＤ調査：２００７年統計より）「日本の就学前教育支出私費負担は56・２％と高い」（同調査）「（家庭における）幼児教育費5年前の3分の2」（ベネッセ調査報告２０１０年9月）等、子どもを取り巻く環境の劣化がマスメディアで取り沙汰されています。こうした発表前の6月末、内閣府より『子ども・子育て新システム』の提案があり、「すべての子どもへの良質な成育環境を保障し、子どもを大切にする社会」（同案目的より）実現が謳われました。乳幼児が育つ環境向上へと社会が目を向けることは喜ばしいことですが…新システムの目玉は、ご存知の「幼保一元化（一体化）」。しかし、省庁間のコンセンサスは伝わってきません。何よりも子どもの「声」（子どもからの生活や育ちの視点）は不在です。「なぜ保育が大切か？何のための保育園・幼稚園？子どもに育って欲しいことは？」が語られず仕舞いです。今、保育を根本考察し、子どもと生活する場からの発信が求められています。

『根っこ』と『翼』：ＯＭＥＰ（世界幼児教育機構）世界大会より

ＯＭＥＰ(Organisation Mondiale pour l'Éducation Préscolaire：オメップ・世界幼児教育機構）は、１９４８年、欧州で国境を越えて子どもの幸せのために協力する目的で設立されました。全ての子どもが家庭、保育・教育機関、社会の中で、よりよく発達し幸せになるように最適条件を用意し、人類相互理解に貢献し世界の平和に寄与することが主たる目的です。（１９９５年横浜で世界大会開催、２０１１年8月東京でアジア太平洋地域フォーラム開催予定。）

8月に三年に一度の世界大会がスウェーデンのヨーテボリ市で開催されました。基調講演を行ったJan Eliasson氏（ヤン・エリアソン／元国連総会議長・元スウェーデン外務大臣・現国連MDGs（ミレニアム開発目標）アドボカシーグループメンバー）は、親族中初めて高等教育を受けた労働階級出身者です。エリアソン氏は、子どもの可能性を信じ、一人の市民として認識すること（単なる「かわいい・無垢」な存在ではない！）、子どもの力強さと真実を見抜く力を知ることを童話『はだかの王様』を引用して語られました。

加えて、ご自身の体験も踏まえ保育の場のミッション（使命）は、「『根っこ』と『翼』」の育みと力説しました。『根っこ』は自分がどこから来たかということ。『翼』は常に冒険心と好奇心を持って新しいものに触れること。この二つを子どもが実感するように保育の場は保障しなければならない、との言葉に「その通り！」と感銘しました。自分の存在価値を承認される場としての根っこ、苦しみや悲しみ、喜びを分かち合いたい時にいつでも帰れる場としての根っこを育てる実践です。

保育園は何のため？：人間形成の根っこを育む保育園を語れるように

北欧の保育の場を訪れた際、感嘆と軽いショックを覚えることの一つに、園の説明（理念・子どもと職員構成・保育内容・保護者や地域との関わり等）を若手保育者が担っていることがあります。傍らの主任か園長が静かに時々説明を加え質問に応えます。

また、イタリアのレッジョ・エミリア市を訪れた時のこと。街の小さなタバコ屋や食料品店で「何のために来たの？」と聞かれ、「幼児教育と街を実感したいから」と応えると、満面笑みで「うちの子は『パンダ（幼児学校）』に通ったんだ、楽しいところだよ」とか、「ディアーナ幼児学校の行き方は大丈夫？」と、保護者ＯＢ／ＯＧが嬉しそうに話されました。ディアーナ幼児学校（3～5歳児）の入園案内書は「ようこそ、ディアーナ幼児学校へ：」と5歳児から新入園児への歓迎の言葉と絵で始まっています。

私自身振り返りますと、新任保育者時代に見学者や研究者に園の話しや子どもと園について語りあうことは皆無だったように思います。

新制度に振り回される前（論じることは大前提ですが）に、保育園は子どもにとってどういう生活・学び・遊び・育ちの場であるのか、おとなの役目は何か、子どもも交えて人間形成の根っこを育む保育園について深く丁寧に語りあいたいものです。次号では、保育実践としての「翼の育み」について考えていきます。

第56回中国地区保育研究大会報告

鳥取県子ども家庭育み協会 副会長　原崎保子

平成22年7月15、16日の2日間、岡山市民会館を主会場に「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」の大会テーマのもと、第56回中国地区保育研究大会が開催されました。

開会式は、梅雨の大雨と重なり、新幹線は止まり道路状態も悪く、参加が心配されましたが、白ブラウスと黒スカートの合唱隊と歌った「花のおさなご」は、参加者の心をひとつにしました。主催者である岡山県保育協議会　安原幹人会長は、保育制度が刻々と変化する中、子どもの最善の利益の視点を忘れることなく社会全体で関わっていきましょうと挨拶されました。

その後、岡山県副知事をはじめ、全国保育協議会　小川益丸会長など来賓の方よりご祝辞をいただきました。

次に、小川益丸会長より基調報告がありました。全保協　共通レジュメをもとに、

1．保育をめぐる状況と全国保育協議会の対応

①「子ども・子育て新システムの基本制度要綱」（平成22年6月26日）

②児童福祉施設最低基準の都道府県の条例化　地域主権一括法案　等

③私立保育所運営費の一般財源化の動き

④3歳以上児の保育所給食の外部搬入の容認

2．保育の質の向上に向けた取り組み

①第3者評価基準評価項目の見直しに向けた検討について

②保育所長の責務と専門性の向上『保育所長の研修体系』に対応した研修の見直し

3．全国保育協議会の平成22年度事業計画の重点事項について説明を受けました。

子どもの最善の利益を保障し、今後の保育の発展のために検討し、法制化や財源確保に向けて、全社協の組織力を結集して取り組んでいきたいと話されました。

1日目**研究発表**は、浜田市保育連盟、れんげ保育園　伴　聡子先生より、『絵本との出会いから』～子どもの心によりそって～のテーマで発表がありました。

絵本の読み聞かせは、優しい笑顔やぬくもりが情緒の安定を促し、創造性や感性を育てる力がある。TV、ビデオ、ゲームの中で育った子どもたちに、絵本の良さを生かすにはどうするのか考えた研究である。広島大学大学院　中坪史典准教授より、今の子どもたちにとっては、絵本もメディアも遊びをリードする力をもっており、両方とも必要な物である。実践記録をもとに、親子関係の具体的な方法や、保護者との連携のとり方を考えてほしいと、講評をいただきました。

午後は各分科会に分かれて熱心に研究討議が行われました。

第1分科会　鳥取県　むつみ保育園副園長　浦林幸子先生、主幹保育士　橋本景子先生による〝保育所保育指針に基づく質の高い保育を提供する〟について、3年前より仲間と共に運動遊びをする「なかよしペア作戦」の中で、Aちゃんの姿を通して体力の向上が見られたとの報告でした。神戸松蔭女子大学　寺見陽子教授より、保育所と地域のニードの協働がうまくできているか、記録を残すことの大切さについて助言をいただきました。

第2分科会　山口県　長門市立日置保育園保育士　熊野恭子先生による〝配慮を必要とする子どもの保育の充実〟について～子どもの育ちを見つめ保育現場で出来る支援を考える～日々の保育の中で、あるがままを受け入れ、保護者の悩みに共感してじっくり思いをくみ取ることが、大切であるとの報告でした。岡山大学大学院　佐藤暁教授より、子どもの背景を知り、発達に応じて専門機関と連携をとること、共通理解のもと支援を長く続けていくように助言をいただきました。

第3分科会　岡山県　平福保育園主任保育士　柳田友紀江先生、かわい保育園保育士　秋山洋子先生による〝保育者の資質向上を図る〟について～思いやりを育てるための保育士の支援を探る～いざこざ場面を肯定的にとらえ、解決方法を学ぶチャンスと考えるとの報告でした。広島大学大学院　中坪史典准教授より保育士の専門知識を生かし、個々に合った支援を心がけるようにとエールを送っていただきました。

第4分科会　広島県　ルンビニ園保育所所長　水野了史先生による〝地域の保護者支援の充実〟～保育所利用家庭、地域の子育て家庭に向けて～について、保育所が子育ての拠点として、山間部や在宅家庭への子育てに関わり、保健師や他職種とのつながり、地域全体で子育てをする環境づくりを担っているとの報告でした。広島女学院大学　石橋由美教授より、親の自立に向けて粘り強く対応していくことが大切と助言をいただきました。

第5分科会　島根県　おおつか保育園栄養士　広戸亜矢子先生による〝家庭との連携による食育の推進〟について、調理担当者部会44園で定例会を持ちながら、菜園、クッキング、食育活動を通して支援を行っているが、アンケートの結果、親と保育園の間で問題意識に開きがあり、取り組みの見直しを考えているとの報告でした。岡山県立大学　久保田　恵准教授に保護者、保育士、地域の皆が協力しやすい活動にするよう助言をいただきました。

第6分科会　広島市　鈴峰園保育園主任保育士　吉田康枝先生による〝公立保育所の使命と地域社会での役割〟について保育園は「安心の居場所」「つながりあえる場所」として子育ての拠点になっている。また、次世代育成の中心的役割も担っているとの報告でした。倉敷市立短期大学　秋川陽一教授より公立保育園のネットワークを利用して、地域の文化を育み成人になるまでの人材育成の役割があると助言をいただきました。

第7分科会　行政説明　厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長　今里　譲さんより保育をめぐる国の動向と課題について説明を受け、会場から多数の意見を出しました。全国保育協議会会長　小川益丸先生をはじめ会員の力を合わせて、子どもの最善の利益を保障できる制度化に向けて取り組んでいきましょうとの報告を受けました。

第1日目終了後、ホテルグランヴィア岡山で、**情報交換会**が実施されました。助言者の先生方、各県の役員をはじめ多くの参加者が、ハワイアンダンスや地域の祭で大きな輪になりました。おいしいご馳走と賑やかな雰囲気に時間を忘れて盛り上がりました。

第2日目、岡山県保育協議会小出妙子副会長により**大会宣言**があり、参加者の総意により承認されました。

記念講演は、音楽家　中西圭三さんの作詞作曲の歌やピンクリボンにまつわる話を聞きました。歌に込められた思いを知ることや、一緒に歌うことで心がすっきりできることを知りました。

閉会式では、岡山県保育協議会安原幹人会長と次期開催地の山口県保育協会　渡邊正善会長の挨拶で、無事にバトンが渡され、2日間にわたる　第56回中国地区保育研究大会を終了しました。

各研修会報告（5月～9月）

子育て王国鳥取県をめざして
第1回施設長研修会

キッズタウン24第2保育園　川端　紀子

平成22年5月26日、施設長研修が鳥取県立福祉人材研修センターに於いて開催された。研修は午前の代議員会終了後の午後より行われ、講師は鳥取県福祉保健部西尾氏・清水氏であった。演題は「行政説明①―子育て支援総室の組織体制・施策体系・保育士研修について」「行政説明②―発達障がい支援体制整備について」の2題であった。

まず鳥取県における、子育て支援総室の機能の詳細について解説された。子育て支援総室の担当する事業の核となるのは「子育て王国とっとり事業」である。本事業は「子育て王国　鳥取県」をめざし、プランを策定。子育て世代のライフワークを見据えた、多岐にわたる施策となっている。その事業の種別・予算等についても解説を受け、事業をより身近に感じることが出来た。また、現在保育の質の向上・維持には、切り離せない関係である保育士研修についても学んだ。研修は人的配置等の問題もあるが、限られた人員と時間の中で最大限の効果をあげるためにはどのように計画したら良いか？と改めて考えさせられた。

後半は発達障がいのある子ども（気になる子を含む）への、一貫した支援体制の実際を学んだ。

その中で興味深かったのは、発達障がい者支援試行事業で開発された支援プログラムについてであった。これは幼児支援・家族支援・地域支援と分かれ、実際のプログラムやシートが例示されていた。帰園してから早速HPで確認したが、ボーダーラインにいる子ども達の道標になるのではと期待感を持った。プログラム等を実際に活用しながら、根拠に基づいた見立ての手助けになるのではと確信した。早速この取り組みを、事例の検討などに役立てていきたいと思った。本研修の広がりのある内容に感謝し、明日への力にしたいと感じた一日であった。

大盛り上がりの実技研修会
第1回保育士研修会

太養保育園　河田　豊美

平成22年5月29日（土）に米子市福祉総合センターふれあいの里にて、1回目の実技研修会「翼くんとあそぼう」が開催されました。

講師の鈴木　翼さんは、私立保育園、子育て支援センターに8年

間勤務された後２００９年４月からフリーのあそびうた作家になられたとの事で、研修会の内容は、歌、ふれあい遊び、身体を動かせる体操遊び、パネルシアターなど盛りだくさんの研修でした。

まず準備体操を行いながら翼さんの楽しいトークで心と体をほぐし、始まりました。

次の「もちぺったん」「ももまんじゅう」という曲は、親子でもできるようにとつくられたそうで、小さい子にはもちろん、年長さんにもスキンシップできる曲でした。そして、「かみなりドンがやってきた」という曲は、幼児クラス向きで、一人でも二人でもできたり、年長さんくらいだと五人組でもできる遊び方のバージョンがあったり、会場でも大盛り上がりでした。

地元のロケットくれよんのお二人も楽しい遊び歌で会場を盛り上げて下さいました。

自分の体を使っての研修会で、すぐに保育に取り入れることができそうでした。

最後に翼さんが歌われた曲〝ゆっくり ゆっくり〟の歌をつくられた時のエピソードを聞き、私も保護者の方に対して、〝もっとこうしてほしい〟と思ってしまったり、自分と誰かを比べて切なくなる事もあったりしますが、ゆっくり前を向いて一歩ずつ私にできる事をしていきたいなあと思いました。

ひ・み・こ・の・は・が・いい・ぜ
第1回乳児保育研修会

河崎保育園　吉田　瑞恵

平成22年6月12日、白鷗大学教育学部児童教育専攻　教授　高橋美保先生をお迎えして、「食育をしっかり保育の中へ・乳児を中心に」というテーマでお話していただきました。

「メモを取らないで聞いて下さいね」、その言葉で参加者の皆さんの目と姿勢がピンと張って始まった研修でした。

子どもにとっての食事は栄養摂取のためであると同時に楽しみでもあり、食べることは人の体と心を育てる。その子どもの育ちを支えるために、食事場面での行動を、観察する、背景を知る、対応する、結果を知る、記録に残す、といった姿勢が重要であること。

咀嚼力作りを目指した離乳食の進め方の内容（成長の目安・食べ方の目安・調理形態）、一人ひとりの全身運動や手指の運動機能・歯の生え方・情緒・発育状態をしっかり観察し進めていくための個別計画の必要性。

食べる動きを引き出すための食べさせ方の大切さなどをユーモアを交えながらわかりやすく話していただき、対応を誤ると、ぺちゃ食べ・食べこぼし・丸呑み・噛めないなど、幼児期や児童期あるいは一生涯の食行動に問題として残ってしまうことを再認識しました。

日頃ゆとりを持って探索活動を見守ることができているだろうか、大人の模倣をし食べ物を差し出すようになった子どもとゆったりとやりとりができているだろうか、と、余裕を持って子どもに向かい合えていない現状を反省しつつ、日々の食べさせ方、姿勢、環境などの見直しと職員間の意思疎通・連携の必要を痛感しました。

噛む効用「ひ・み・こ・の・は・が・いい・ぜ」、◇ひ（肥満を防ぎ）◇み（味覚が発達し）◇こ（言葉の発音が明瞭）◇の（脳の発達を促し）◇は（歯の病気予防）◇が（ガン予防）◇い（胃腸快調）◇ぜ（全力で物事に集中して取り組める）、すごい効用ですよね。

最後に、先生の2つのことば、「咀嚼力を育てることは一生のプレゼント」「実家的な存在の保育園に」を胸に、日々実践していきたいと思います。

保育所保育指針一年を振り返って
第1回主任保育士研修会

子供の国保育園　仲嶋　明子

第1回主任保育士研修会は、7月3日、「保育所保育指針の展開」と題して、鳥取県福祉保健部子育て支援総室保育幼児教育担当東部保育指導員伊藤幸子氏の話を聞いた。

はじめに、大阪での研修会について聞いた。「子ども子育て新システム検討会議があり、幼稚園・保育所を一体とした子ども園（仮称）というシステムが作られるかも知れない。幼稚園教育要領と保育指針を統合し、小学校学習指導要領との整合性・一貫性を確保した子ども指針を創設し、子ども園としての機能の一体化を推進するというような内容で、このような流れを意識しておくように、ということであった。

次に、保育所指針報告から1年を振り返っての指導があった。

○保育課程は、本年度作成した物を基にオリジナルの物を作る。保育指針が法令になったので、原則の部分は、必ず守り、保育指針4章1保育の計画を基に作成する。○自己評価は、良いところから上げていくこと。前向きな話をする中で課題や特徴がでてくる。○保健計画は、独立したものを作る。○職員の研修は、研修に行く目的を明確にし、園長が把握して計画を立てる。○保育所児童保育要録は、どの園も多少の違いはあったが、ほとんど同じ様式であった。保育所の保育指針（2）事故防止及び安全対策・脅滅の特定（ハザード）は、自分の園で必要なマニュアルや自分の園で想定される事故の対策のマニュアルを作成する。ヒヤリハットは、どうしたら防げたかを考え対策をとる。そして、保護者からの苦情をしっかり聞くなど最初の対応が大切。

以上のような内容で、これからの保育教育に大なる指針をいただいた。

平成二十二年度初任・初級保育士研修を終えて
初任・初級保育士研修会

倉田保育園　山本　大路

今年も初任・初級保育士研修が七月七～九日の三日間の日程で開催されました。

参加者は三十六名で、初日は県内東中西部計十三園に別れての保育現場研修、二日目・三日目は船上山少年自然の家を会場に、講義、実技、自然体験などの研修が行なわれました。

船上山での一日目は、コミュニケーションプロデューサー八百谷和子氏を講師にお招きし、「より良いコミュニケーションのために」と題してコミュニケーションの原理原則を学ぶための講演をいただきました。

コミュニケーションとは情報と感情の共有であり、その習得のためには、①あいさつ、②返事、③身だしなみ、④メモをとる、⑤ルールを守る、⑥報告・連絡・相談が不可欠である、といった基本的な要素や、相手に伝わりやすい語調、抑揚の付け方、また聞き方などといった実技的な内容まで、プロのアナウンサーでもある氏の実演も交えながら分かりやすく話していただきました。

その他、自身の子育て体験も交えた保育園でのエピソードや、保護者対応の㊙テクニックなど、初任でなくとも聞いておきたい話がぎゅっと詰まった講演でした。終わりに「技術を習得することは人と比べるものではない。今の自分となりたい自分を頭の中に思い描きながら、これからも日々の保育に取り組んでください」と会場に呼びかけられました。

午後は、米子市児童文化センターの山根郷子氏による、わらべうた遊びの実技や、自然の家専門指導員による大自然に囲まれた船上山ならではのネイチャーゲームで、この日初めて顔を合わせた参加者たちの緊張もほぐれるような有意義な時間となりました。

夕食後には、五グループに分かれてグループ討議も行なわれました。参加者それぞれが率直に思ったことを話し合い、非常に活発に討議がなされました。

一夜あけて研修二日目。木のおもちゃ専門店「木や」の高橋克己氏をお招きして、積み木やパズルを使ったおもちゃ遊びの中の成長表現や、目安年齢とおもちゃの分類など、「遊び道具」としてのおもちゃについて講演をいただきました。今まで気付かなかった積み木の楽しさや無限の可能性を再認識するとともに、保育園に持ち帰ってさっそく試してみよう！という気持ちになるステキなお話しでした。

その後、県育み協会副会長の福田泰雅先生が「保育の質を高める考え方」という講演で、子どもは遊びによって発達する。そのために遊びを広げ、深め、とことん遊ぶ。保育者は心を固くしないで、柔軟に物事を考えよう！と参加者に呼びかけられ、午後のグループ討議（まとめ）をはさんで、全ての研修は幕を閉じました。

今年度の日程も非常に内容の濃い、充実したものとなり、また参加された先生方の意欲を大変感じた三日間でした。

絵本のすばらしさを伝えよう
第2回主任保育士研修会

つばさ保育園　原　京子

平成22年7月24日（東部会場）

25日（西部会場）の2日間、青山学院女子短期大学　中村柾子先生を講師にお迎えし開催されました。

保育士として36年間勤められた先生は、最初に「保育の仕事が大好きで、いまでも自分は保育者だと思っています」と言われた通り、子ども達との豊かで楽しい沢山の関わりを基に、絵本の大切さ楽しさを優しい口調で、2時間たっぷりと講演して下さいました。

保育士はまじめが基本にありながら、どれだけ子どもの前ではじけることができるか、子どもと一緒に夢中になって遊ぶことが必要。絵本も読まなくてはいけないではなく、自分がどれだけ楽しめるかが大事だと話されました。

子どもの心に残っていくものは、人の声によって届けられる。大人になった時も、その日の声の感じぬくもりをちゃんと覚えている。保育の場で絵本を読むとは「楽しみをもたらす」につきる。言葉と絵によって子どもと大人がつながっていく。体で体験する事と、言葉で体験する絵本の両方があり、子どもの生活はパーフェクトになる。

絵本を選ぶ時、目的（年齢・季節・興味）と質を考える。まず自分の保育園にどんな絵本があるのか知り、ブックリストを作り、読み聞かせしたい軸になる絵本を各年齢毎に10冊ずつ決めること、良質な絵本を選ぶ目を持つこと、それが子どもの生活の豊かさにつながっていく。

保育園は良質な文化を発信する場であり、子どもの育ちに必要な、沢山の言葉が詰まっている大切な絵本を、ずっと伝えて欲しい。を最後の言葉にされました。

子ども達の顔を思い浮かべながら、共感することが沢山ありました。私達は子ども達が大きくなった時、「先生が読んでくれた絵本大好きだったなー楽しかったなー」と思い出し、心が温かくなるよう、これからも絵本の読み聞かせを一緒に楽しみ、すばらしさを伝えていきたいと思いました。

子どもに向き合うために
第1回障がい児保育研修会

バベール園　吉岡　麻弓

平成22年度鳥取県保育所（園）第1回障がい児保育研修会が8月7日に福祉人材センターで、8日には米子福祉保健総合センターで開催されました。講師に、川崎医療福祉大学重松孝治先生をお迎えして、「障がいをどうとらえるか子どもに向き合うために」というテーマで講演をしていただきました。

ICF（国際生活機能分類）における障がい構造モデルをもとに障がいの3つの段階を理解し、保育者が子どもに、なにをどのように身につけさせ活動させていくのか。また、子どもを理解するための支援のポイントと具体的な支援の手立てについてお話を聞きました。

理解されない子どもたち（見えない障がい）は、外見上は特徴が分からないがある特定の周りには簡単なことが困難であったり、社会性や上手く説明できないといったコミュニケーションの問題をかかえることが多い。子どもを理解するためには、行動や様子を見ること、子どもの話やメッセージを聴くこと、そして、関係者と連絡を取り合うことが大切であると話されました。子どもの理解を進めるために、保育者は「褒める」「認める」「子どもを肯定する」言葉かけの配慮の仕方、また、子どもを認める引き出しをたくさんもつため、保育現場において一人一人の特性に応じた実践方法について学ぶことができました。

具体的な支援の手立てとして、子どもに十分理解できる方法で伝えるためには、簡潔に（何を伝えたいのかを明確に）、具体的に（抽象表現を避ける）、モデルとして（穏やかに）、聞き取りやすく（ゆっくり・はっきり・明確に）、肯定的に（褒める・認める）、そして、視覚的に示す工夫に取り組みたいと思います。

幼児期は、成功体験を積み上げる大切な時期です。毎日、子どもと関わっている私たち保育者が子どもの思いを理解するため、観察を行いどんな支援が必要なのか、また、どう育てていきたいのかを保護者と連携を図り、日々子どもと向き合っていきたいと思います。

鳥取県のこれからの食育を考えよう
第1回食育研修会

社保育園　谷重　栄子

平成22年度鳥取県保育所（園）第1回食育研修会が7月10日東部会場（福祉人材センター）、11日西部会場（米子国際ファミリープラザ）で開催されました。講師に、鳥取県福祉保健部健康政策課　栄養士　難波信子さんをお迎えし、「保育所（園）における食事の提供と食育の推進」というテーマで講演をしていただきました。

はじめに、国の食育基本法に基づき、都道府県は100％・市町村の50％を目標に、食育推進計画を策定しなければならないが、鳥取県では19市町村のうち3つの自治体（倉吉市・北栄町・南部町）での策定に留まっていることをお話されました。ここで、県内の食育推進計画の策定が、わずか3自治体である現状は何故なのかを少し疑問に思いました。

次に、鳥取県のこれからの食育の指針『食のみやことっとり～食育プラン～』の概要を説明された中で、食をめぐる現状を踏まえた上での　1、健全な食習慣の定着　2、食に対する正しい知識の普及　3、食に対する感謝の心を養う　4、豊かな食文化の継承　という4つの重点目標を示されました。またその中で、保育所における実践行動計画を具体的に説明していただきました。

児童福祉施設における食事の提供ガイドについての説明では、日頃の業務の中であまり目にすることのない「日本人の食事摂取基準」を活用した食育計画の実施についても、詳しく教えていただきました。

今回の研修は、私にとって難しい内容でしたが、国・県の法律、規則は基より、日々の業務の裏づけとなる基本的な知識を、調理員自身も身につけていなければならないと改めて感じました。

保育者の広場

ポジティブ・ハッピーライフ

松保保育園　長本　浩平

サーフィン、それは私のライフスタイルの一部である。大自然を相手にするこのスポーツ。自然は美しい姿で、癒しを与えてくれる。しかし、時に自然は牙を剥き、その偉大さを見せ付ける。私は、そんな大自然の中で波に乗り、自然と調和した瞬間、言葉では表せない感動を覚える。

夏をイメージするサーフィンも、日本海での本番は冬。寒くて挫折しそうになったときもあった。しかし、うまくなりたいと思う一心でつらさを乗り越えてきた。そして今、大事なことを学んだ。それは楽しむための努力の大切さだ。その学びは、仕事をするうえでも良い影響を与えている。つらいと思いながら仕事をしたくない。やるならとことん楽しくやりたい。そのために努力するという当たり前のようですごく大切なポジティブな考え方も改めて教えられた。今となっては、サーフィンをしていたからこそ仕事が楽しめる。仕事をしているからこそサーフィンが楽しめるように感じる。そんな自分を成長させてくれるスポーツに出会えたことに感謝すると共に、新たな刺激を求めて今後も思いっきり楽しんでいきたい。

俳句と私

ひばり保育園　佐藤多美恵

保育士が抱く汗の子涙の子
園児らを虜にしたる団子虫

この道五十余年の保育の仕事の傍ら、ほっと一息ついた時私には俳句があります。一日の仕事を終え俳句を詠むことにより新しい発見と明日への活力が湧いてまいります。また休日には吟行することで、気分転換となり、私にとって俳句は欠かせないものとなりました。人の何気ない仕草、道端の名もない草にも季節感を覚え発見が生まれてまいります。若いころ日記をしばらく続けたことがありましたが、まず読み返すことがありませんでした。その点俳句は五七五の十七文字にまとめることにより、一目で分る日々の自分史を作り上げていくことになります。

また、園児たちにも俳句の楽しさを伝え、自然体の園児たちにそっと近づきいろいろな発見により共通の感動が生まれます。出来上がった作品は短冊にしたため作品展に出展しております。今年もたくさんの作品ができるのを楽しみにしています。

はなびしてぱちぱちぱんぱんたのしいね
ひまわりさんいちれつならんでせいくらべ

書類を減らそう！
語り合いから始める書類減らし

鳥取県子ども家庭育み協会
副会長　福　田　泰　雅

保育に関する書類は、近年増え続けている。原因は保育所に求められている業務が増えているからだ。業務が増えれば、それに伴い書類も増えることになる。一つ一つの業務は書類によって管理、改善され、より質的に向上することが望まれる。そのようにして、ビッグバン的に書類は増え、樹形構造が強化されていくのだ。

しかし、書類が増えることに対し、二点の疑問を持たなければならないだろう。その第一点は、仕事量の増加に対し、それらを実現するための体制が不備であること。そして第二点に、すべてにおいて書類が充実することは、質的な向上につながると言えるか？という疑問についてである。

第一点については、現行の保育所保育指針が改定される際、説明会などにおいて、業務の多様化に伴って、保育士などの仕事が増加することを指摘し、対処をお願いしたが、これらを実施していれば、処遇に関しても改善されていくとしか回答がなかった。

そして懸念していた通り、指針改定後、多くの研修会などで見る保育士たちの表情には、明らかに疲労の色が濃く見える。皆、疲れているのだ。

保育することの素晴らしさ、楽しさとは引き換えにできないほどの労働条件の悪化は、離職率の上昇や保育士を志望する人の減少に直結するだろう。

第二点について、その考え方などは、より複雑だが、結論から言えば、書類の作成を仕事としてはならないということだ。

誰が考えても当然のことが、どこから見ても行われていないのではないだろうか？その原因は、仕事内容に優先順位が付けられていないため、どの業務内容も同等に扱われているためであろう。

保育には、最も上流に保育理念、保育方針、カリキュラムの編成などがある。その下流に、年間計画、月案、週案、日案があり、それに合わせて振り返りの文章作成がついてくる。

もちろん以前にも増して一人一人の子どもに視点を合わせて保育することが求められ、保育の評価をし、さらに地域社会の子育て家庭のことも保育として考えなければならず、それに加えて、虐待防止関係や保護者の苦情に対応し、個人情報の保護も考慮し、要録も作成…。それに合わせて、書類がより緻密に作成され、すべてに守秘義務があり、情報の公開にも対応することが求められれば、当然書類は多くなる。

もちろん書式の工夫、習慣化による文書作成能力の向上も必要だ。

しかし、保育を実践するうえで、我々保育者が第一に考えなければならないことは、保育である。

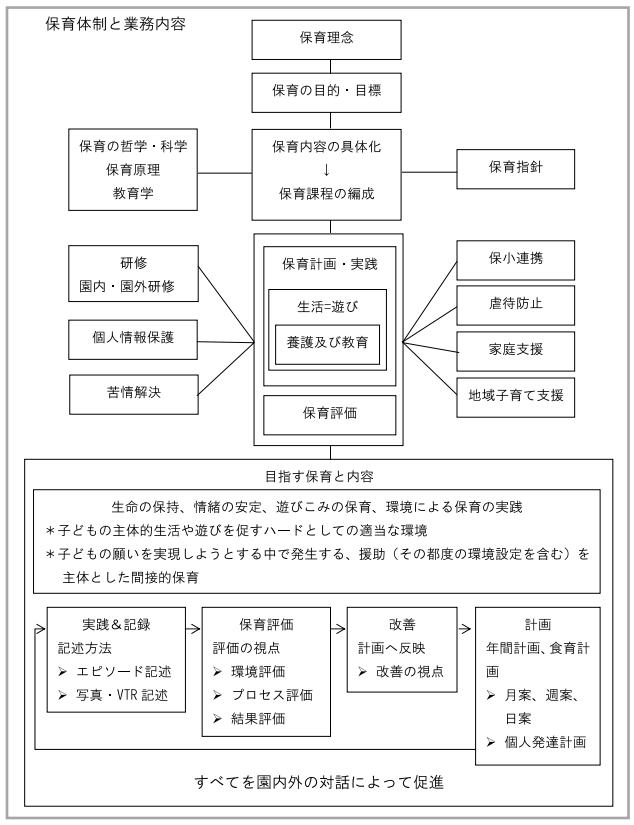
そうであるならば、質の高い保育を実践するために必要な書類とはどのようなものかを保育所（園）内で話し合い、保育に本当に役立つ書類を優先順位の一番上に持ってくるべきだろう。

そのほかの書類は、それら保育実践よりも簡素でよいはずだ。

保育評価についても、依然とんでもなく緻密なシステムが作られているものを目にすることがあった。明らかに過剰反応であり、評価の仕組みのために保育が存在しているとしか言いようがなかった。

しかし、緻密に書類を作ることが次の保育や、全体として保育の質の向上につながるという保証はない。

やらされる保育からやりたい保育へ脱皮するためにも、やりたい保育、やるべき保育に必要な書類を皆で作り上げることが書類を減らす出発点であろう。



食育の取り組み
～ぱくもぐ集会を通して～

小鴨保育園　石田　雅美

はじめに、小鴨保育園は、倉吉市の市街地より西側に位置し、近くには小鴨川が流れ、緑豊かな田園地帯が広がっています。また、1年を通して自然に触れたり、季節を感じたりすることのできる恵まれた環境にある保育園です。

8月1日現在、園児数93名（3歳未満児 34名、3歳以上児 59名）が、毎日元気よく通っています。

給食は、調理員2名で、園児の離乳食・除去食・普通食と職員20名分・一時保育利用者分を含む、約１２０食を作っています。

毎日、保育園に通ってくる子どもたちの様子を見ると、「朝からあくびをする」「すぐに疲れる」「好き嫌いが多い」など気になる姿が見られます。基本的生活習慣や食への関心を少しでも高める為に、「食育」に重点を置いて保育に取り組むことにしました。4月に入ってすぐに、年間計画を作成して、「どんな取り組みをしていくのか。」具体的な内容を職員会で話し合いをしました。

平成17年度に食育基本法が制定されてから、いろいろな食に関する取り組みは行っていましたが、今年度から新しい取り組みとして、毎月19日（土・日の場合は、その前後）に食育集会を開くことにしました。

本園の食育目標

「ぱくぱくもぐもぐ　なんでもたべるげんきなこ」の「ぱくぱくもぐもぐ」からとり、この食育集会を「ぱくもぐ集会」と呼んでいます。

ぱくもぐ集会は、月によって多少内容変更はありますが、

1、うた　「えいようのうた」
2、クイズ
3、劇
4、給食の先生（石田先生）の話
5、今月の約束の確認
6、うた　「いのちがいっぱい」

という、プログラムで実施しています。

「えいようのうた」は、赤・黄・緑の食品群の入った歌詞を♪ごんべさんのあかちゃん♪の曲で替え歌にしたものです。

子どもたちにたくさん食べ物に興味を持ってもらうために職員がペープサートを持ってステージに立ち一緒にうたっています。

クイズは、食べ物にちなんだ問題で、絵を使ったりしてわかりやすく出題しています。

劇は、その月の食育に関する約束を職員が寸劇風にして演じ、子どもたちに伝えています。実際に人が演じることによって子どもたちも喜んで、より一層関心を持って、真剣に見てくれています。

最後に、食べ物は、私たちの命になっていくという内容のうた「いのちがいっぱい」をうたって集会は終わりですが、月によっては、子どもたちと一緒に作った梅ジュースを試飲したり、豆を箸ではさむ「豆つかみ大会」など、お楽しみを加えたりしています。

毎回、子どもたちにより良く伝わるように、保育士と調理員とでアイデアを出しながら企画・実施しています。

このぱくもぐ集会を実施するようになってから、

「きょうのうんちは、バナナうんちだったよ。」

「朝ごはんを食べてこないと、元気がでないから朝ごはん食べてきた！」

など、子どもたちから話してくれる姿が見られるようになりました。

また、

「家からぱくもぐ集会の話をしてくれます。」とか、ごはんを食べていると急に、

「『動物のいのちが僕たちの命になってるんだって』と話しだし、何を言うのかな？と思ったら、ぱくもぐ集会で話を聞いた話だったのです。まだ年少なのに、すごいなあと思いました。」

という、保護者の方からうれしい声も聞かれるようになりました。

このような声を聞いたり、子どもたちの姿を見たりしていると私たちも「がんばろう！」という気持ちになり、励みになります。

飽食の今の時代、食べたいものが食べたいときにすぐ手に入る便利な社会となり、家庭で当たり前に身につけていた基本的な生活習慣や食事マナーが身についていなかったりする中で、保育園での食育は、「食べることの大切さ」「いのちの大切さ」を子どもたちに伝える大きな役割を担っています。

「ぱくぱくもぐもぐ　なんでもたべるげんきなこ」になるために、保育士と調理員が連携をし、共通の認識を持って、食育を進めていきたいと思います。

今　後　の　予　定

研　修　等	期　日	場　所	備　考
子ども・子育て新システム研修会	平成22年10月６日	倉吉市：倉吉未来中心	
初任・初級保育士研修会③	平成22年10月13日	倉吉市：倉吉体育文化会館	
第30回全国私立保育園連盟青年会議全国大会	平成22年10月14～15日	福岡県北九州市	全私保連関係
第54回全国保育研究大会	平成22年10月20～22日	和歌山県和歌山市	全保協関係
第２回障がい児保育研修会	平成22年10月23日	鳥取市：とりぎん文化会館	
	平成22年10月24日	米子市：米子コンベンションセンター	
子ども・子育て新システムに関する意見交換会	平成22年10月26日	鳥取市：福祉人材研修センター	
第２回食育研修会	平成22年10月30日	米子市：ふれあいの里	
	平成22年10月31日	鳥取市：福祉人材研修センター	
第３回施設長研修会	平成22年11月９日	倉吉市：倉吉体育文化会館	
全国私立保育園連盟中・四国ブロック研修大会	平成22年11月18～19日	広島県広島市	全私保連関係
日本保育協会中・四国ブロック研修会	平成22年11月18～19日	愛媛県松山市	日保協関係
第44回全国保育士会研究大会	平成22年11月19～20日	三重県津市	全保協関係
第２回乳児保育研修会	平成22年11月20日	米子市：ふれあいの里	
	平成22年11月21日	鳥取市：福祉人材研修センター	
第58回鳥取県保育推進研究大会	平成23年１月９日	倉吉市：倉吉未来中心	
第２回保育士研修会	平成23年１月29日	鳥取市	
	平成23年１月30日	米子市	
第３回食育研修会	平成23年２月	２会場	
第36回保育総合研修会	平成23年２月２～３日	大阪府大阪市	全私保連関係
中国地区保育協議会人材養成研修会	未定	未定	全保協関係

＜絵本の紹介＞

「でんしゃでいこう　でんしゃでかえろう」

お話・絵　間瀬なおかた（ひさかたチャイルド）
ISBN：978-4-89325-489-4　定価 1,000円（税別）

山の駅から海の駅へと電車が走る穴あきしかけ絵本です。

「ゴー　トンネルをぬけるとー」と、トンネルをぬけるたびに山から海へと少しずつ景色が変化していきます。トンネルに見立てた小さな穴から見える景色にどんどん夢が広がっていきます。

そして、トンネル内では、電車の中の家族の様子が細かく描かれ、絵本を見る人をほのぼのとさせてくれます。トンネルに入るたびに家族の様子も少しずつ変化しており、その変化も楽しめます。

この絵本の醍醐味は、前からも後ろからも読めることです。表紙は「でんしゃでいこう」、裏表紙は「でんしゃでかえろう」になっています。「でんしゃでいこう」を読み終えると、かわいい車掌さんが「このほんは、うしろからもよめます。また、でんしゃにのって、やまのえきまでかえってみてください。」と案内してくれます。

終わりのない絵本です。繰り返し電車の旅をお楽しみください。

「コッコさんのおみせ」

お話・絵　片山　　健（福音館書店）
ISBN：4-8340-1273-5 C8795　定価 743円（税別）

『コッコさん』はお店屋さんごっこを始めます。自分の宝物をご馳走に見立て、ケーキにジュース、カレー…子どもの好きそうなメニューの数々なのですが、コッコさんのお父さん、お母さん、お兄ちゃんは相手にしてくれません。

そこで、みんなに一緒に遊んでもらおうと、考えたコッコさんの方法とは!?

子どもならきっと同じことを考えるだろうなっ、と頷いてしまいます。また、色彩豊かで細かな絵にも引き込まれ、ページをめくる度、絵本に頭をくっつけるように見入ってしまいます。

ストーリーも絵も身近に感じ、親近感が湧きます。

ふっと、微笑んでしまう結末に何度も読みたくなってしまうお話しです。

＜職員図書紹介＞

「心をことばにのせて」
－子どもとのいい関係とことばの育ち－

著者　中川　信子（ぶどう社）
ISBN-13:978-4892400919　定価 1,478円（税込）

ひとりのＳＴ（言語治療士）として、ひとりの母親として、お母さんたちと“一緒に考える”ことは、させてもらっていいのではないだろうか。

ちがった視点からの思わぬヒントが役に立つことも、たまにはあるだろう、と。子どもと遊び、子どもを観察します。お母さんの悩みを聞き、お母さんの相談にのります。こんな著者の思いで書かれた一冊です。

ことばを育てるには、毎日のくらしの中ではぐくむ、子どもとの豊かなコミュニケーション。ことばは、人と人とのあいだで育っています。子どもの関係のあり方を考え、ことばを引き出すかかわり方、ことばのかけの仕方が紹介されています。子どものことばについて思い悩んでおられるお母さんたちにも、一読を進めてはどうでしょう。

編集後記

最近ダイエットをしていて気が付いた。食事の量を決められた分量に減らすと、てきめん気力が失われ、すべてにおいて積極的に動くことも考えることも、おっくうになるのだ。

三度の食事をまともにとらない子どもは、心も不安定で、遊べないことを実感した。（Ｔ・Ｆ）

運動会という大きな行事を終え、夏の疲れもどこへやら・園庭の芝生で元気一杯に遊ぶ子どもたち。そのパワーは、私たち大人には決して真似ができない程です。未来を担い、無限大の可能性をもった子どもたち！これからもよく食べ・よく遊び、愛情一杯受けながらパワー全開で心も体も大きくなーれ！（Ｙ・Ｍ）

年長・中児が参加し、お互い緊張気味に始まった地域のお年寄りとの交流会。遊びが深まると会話も弾み、とても素敵な笑顔を見ることができました。

「子どもさんから、元気をもらった。」「今度は、遊ぶ物を作って、一緒に遊びたい」の要望で次回の遊びの約束もできました。子どもたちの楽しみが、また一つ増えました。（Ｍ・Ｙ）

飼育、菜園活動を通して、労働の大切さと収穫の喜びを子どもたちと感じたこの夏。暑さとの戦いでしたが、共に流した汗は、宝物です。夏野菜の次は、土の中に眠るさつまいも！大きく育っていますように。（Ｃ・Ｋ）

手足が冷えるので冷房が大嫌いな私。猛暑続きだったこの夏は、エアコンとともに腹巻が大活躍でした。お腹が温かいと手足も冷えないから不思議です。極寒の冬？を乗り切るためにも腹巻はお勧めですよ。（Ｓ・Ｓ）

運動会でのバルーン競技、ほとんどの子が、ぶっつけ本番であったにもかかわらず、未満児さん、楽しそうに上手にできました。子どもって見よう見まねでけっこうできるものなんですね。（Ｈ・Ｓ）